

国境紛争から生活圏へ

フランシス・デフン・リー(Francis Daehoon Lee)

韓国 聖公会大学(SungKongHoe University)

フランシス・デフン・リーは、韓国の聖公会大学の平和学研究教授である。現在彼は国連の「女性・平和・安全保障に関するアジア太平洋地域諮問委員会」の委員、そして民主的社会を求め全国教授会の国際連帯委員会代表を務める。彼の研究は、人権や重大な安全保障問題、そして市民社会の発展に重点が置かれている。また彼は、ARENA (Asian Regional Exchange for New Alternatives)の代表でもあった。彼は平和・軍縮センターの元執行委員で、アジアにおける平和・人権・民主主義の研究をしている大学ネットワークである「アジア市民社会教育ネットワーク」の統括もしていた。

今日私たちは東アジアに広がりつつある偏狭で民族主義的な政治を変えるために、領土・国境問題を特別地帯設定という新しい構想に創造的に転換する特別の努力をする必要がある。その紛争に民族主義的方向で対応すると、それぞれの国において短期間右翼の政治的影響が増加するかもしれない。しかしそれはその地域における全般的後退につながる可能性がある。東アジアにおける平和団体は、民族国家の領土保全の政治的利用・影響を変えることができるのである。それは対立した境界地域の問題を、「非国有化地帯」という別の構想を持つことによって可能である。この構想は、境界問題を次のような地帯の取り組み方に置き換えることを概念的に説明することである。例えば、生物圏、平和・非軍事化地帯、紛争緩衝地帯、移住が主権国へ与える影響範囲、暴力被害者のための避難所などである。「境界」の地理的概念は、「ライフゾーン」に置き換えられるべきである。また私たちはさらに与えられた境界を超えて交流する人々の体験と可能性を調査し、正しく認識する必要がある。幾何学的境界に取って代わるライフゾーンは、人類と他の生物が共存しお互いに支えあっている生物圏の地帯として、環境保護的で環境・平和の概念に基づいていなければならないのである。「ピースゾーン」「非軍事化地帯」「非核地帯」の伝統を大事にしながら、ライフゾーンはまた「軍隊のない地帯」から「生命を尊重する地帯」へ概念化する必要がある。

(翻訳：山根和代)